The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	岩屋寺蔵『高僧傳』における鼻音韻尾の表記とその加点態度について
Author(s)	中野, 直樹
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2016, 50, p. 73-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70035
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

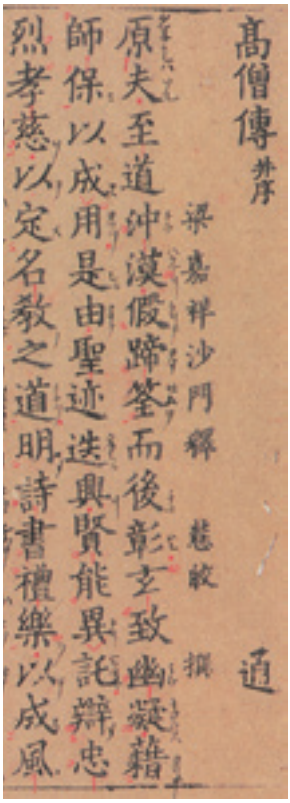
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

岩屋寺蔵『高僧傳』における鼻音韻尾の表記とその加点態度について

中野　直樹

キーワード：高僧傳／訓点資料／日本漢字音／鼻音韻尾／声点


高僧傳 并序
梁 嘉祥沙門釋 慧皎 撰
原夫至道沖漠假蹄筌而後彰玄致幽凝藉
師保以成用是由聖迹迭興賢能異託辯忠
烈孝慈以定名教之道明詩書禮樂以成風

⇓参考図版（岩屋寺蔵『高僧傳』巻一序文冒頭）

1：はじめに

かつて本邦人は、唐土から輸入した漢語を位相の差はあれども日本語の音節構造に応じて発音し、また様々な表記形でこれを表した。本稿で取りあげる鼻音韻尾も同様で、その発音と表記形は、中古以来様々な変遷を見た。

仏典・漢籍共に、院政期頃までは原則として漢語原音に対応する形で鼻音韻尾を書き分けていたが、この漢語原音に即した鼻音韻尾（特に m・n 韻尾）の書き分けは鎌倉時代中期には殆どの資料で混乱し、一部保守的な資料を除いて失われてしまった。(1)

本稿は、院政末期から鎌倉初期頃の訓点を有すると考えられている、岩屋寺蔵『高僧傳』における鼻音韻尾の表記とその加点態度に注目し、それが日本漢字音史上どのように位置付けられるものか、また、本資料の訓点加点時期はいつ頃なのかについて考察するものである。

2：『高僧傳』について

2-1：『高僧傳』の内容と諸本等について

『高僧傳』は、梁代に釈慧皎が当代以前に存した僧伝の類の不足を補うため、後漢の永平十年（67）から梁の普通三年（522）までの高僧約五百人の伝を録したものである（紀（2009）・定源（2015））。これに続く、唐宋代成立の僧伝と併せて、「三朝高僧傳」と呼ばれる。

『高僧傳』は、各国にいくつかの写本・刊本の存在が知られており、日本では、石山寺本・興聖寺本・興福寺本・金剛寺本・西方寺本・聖語蔵本・四天王寺本・新宮寺本・七寺本・妙蓮寺本（以上、写本）、岩屋寺本・増上寺本（以上、刊本）が現在確認されている（上杉（2014）・定源（2015）・『石山寺の研究（一切經篇）』（1978）・『興福寺典籍文書目録』（1986）・『増上寺史料集別巻』（1981）・『日本現存八種一切経対照目録』（2006）による）。[2]

右に挙げた諸本のうち、ここでは訓点の存在を実見および先行研究により確かめ得た加点本（四天王寺本・石山寺本・興福寺本）のみ確認しておく（岩屋寺本は次節以降参照。無加点本については、紀（2009）・定源（2015）等参照のこと）。以下に、三本の書誌情報等を簡単に述べておく。

四天王寺本は全十巻のうち、一 - 九巻までが存している。定源（2015）は、奥書に保安四年（1123）と大治二年（1127）の年紀が見えることから、院政期の写本であるとし、そこに見られる訓点には、数はかなり少ないが複数の筆により朱筆で仮名点・ヲコト点（喜多院点カ）・声点・合符・句点の加点があり、墨筆で仮名点・ミセケチ・訂正符・合符が加点されるとする（但し、訓点の加点年代は不明）。また、氏は各巻紙背の継目三ヵ所または四ヵ所に、「法隆寺　一切経」と、墨による印があり、四天王寺本は元々は法隆寺一切経に蔵されていたことも指摘している。

次に、石山寺本であるが、岩井（1938）・大矢（1909）・『石山寺の研究（一切經篇）』（1978）によると、当該本は十帖で、[3] 奥書には、仁平四年（1154）・応保二年（1162）・長寛元年（1163）の年紀が存し、訓点は全て朱筆で、仮名点（音・訓）・ヲコト点（円堂点カ）・声点・合符・句読点が見えるとする。[4]

最後に興福寺本である。これは巻十三のみの零本で、中田（1954:541）等によって、奥書に康和二年（1100）の年紀が見えることが明らかにされている。『興福寺典籍文書目録』（1986）には、興福寺本は本文・訓点共に院政期の写本であり、訓点は朱筆で仮名点・声点・ヲコト点（喜多院点）が加点されていると報告されている。

2-2：岩屋寺蔵『高僧傳』の書誌について

岩屋寺蔵『高僧傳』（以下、『高僧傳』）十四帖（刊本）は完本である。次に、本資料の装訂と寸法等を示す。

〔装訂〕折本。

〔寸法〕巻一 - 十四　表紙：29.5 - 29.8cm　同匡郭：24.5 - 25.5cm。

〔行数等〕一紙三十行。一折六行。一行十七字（例外有）。天地に墨界が有り、行間は無界となっている。

〔料紙〕麻紙カ。

〔訓点〕後述。

〔紙背〕巻三に朱印有り（判読不可）。

〔他〕論・賛・音義が付されている場合がある（これらは本文と共に刷られたものである。またこれらが付されている場合でも三つ全てを備える訳ではない）。また、巻六以外の巻末には、全て岩屋寺の朱印が押されている（印には「尾州知多郡大慈山巌窟寺大蔵典記」とある）。

外題は、巻一に「高僧傳巻第一」、巻二に「高僧傳巻第二」と打付け書きされ、巻十四まで同じ体裁となっている（但し、巻十一から巻十四にかけては「巻」字が書かれず「高僧傳第十一」のようになっている）。また、巻一から六までは外題の下に「通」とあり、巻七から十四は同じく外題の下に「廣」とある。[5]

本書は南宋思渓版であると思われるが、[6]前思渓か、後思渓かは今のところ分からない。前者であれば、刷りは北宋

末期から南宋紹興二年（1132）、後者であれば淳祐年間（1241-1252）と考えられる。[7] 本文全体に詳細な訓点が加点されており、本文の頭注には漢籍および韻書による書き込みが見られる。[8]

また、巻五・七・十・十二・十三に弘安四年（1281）、巻十四に弘安四年・永仁元年（1293）の年紀が入った奥書が存する。次にその奥書を示す（字体は通行のものに直した。／は行が変わることを示し、〈　〉は後筆の可能性があることを示す。奥書の影印は稿末に付す）。

巻　五：弘安四年五月十九日一覧了　隠老法助

巻　七：〈仁和寺准后御記也〉／弘安四年五月廿八日於開田松窓敬以／披覧了〈老隠法助〉

巻　十：弘安四年六月十九日見之了権化之／神異誠有所以哉可貴々々

巻十二：同廿五日敬拝見之了　法助

巻十三：弘安四年六月廿八日拝覧了／法助

巻十四：弘安四年六月廿八日一部十四巻披覧了／願生々世々結法縁於彼高僧耳／沙門法助／〈已上開田殿御自筆之御日記也〉／此伝一部十四巻桂大納言入道殿自筆之点本也末代重宝輒／不可取出之矣于時永仁元年十二月三十日一部奉転読之了　経弁四十八

岩屋寺に一切経が施入されたのは宝徳三年（1451）であるが（山本（1934））、この一切経に含まれている本書の来歴についてはよく分からない。奥書には経弁と法助の名が挙がっており、経弁は高山寺僧であり、仁和寺僧の法助も一時高山寺に住んだと言われる。従って、本資料はもと京都高山寺に蔵されていた可能性が高いと考えられる（山

本（1934）・上杉（2014）・落合（2015））。

しかし、誰が本文中の訓点を付したかなどは、奥書からは結局分からない（法助と経弁の奥書には、「一覧了」等とあるのみでこれが加点を意味したか不明である）。巻十四の奥書にある経弁の言によれば、本書の訓点は桂大納言入道による点であるとするが、これまた詳細は不明である。桂大納言入道とは、院政期に活躍した公卿の藤原光頼を指す[9]。

2-3：岩屋寺蔵『高僧傳』の訓点について

岩屋寺蔵『高僧傳』の訓点については、金水・山田・中野（2015）にまとめられている。それによると、本資料には朱墨の二種が存し、朱筆による訓点には、声点・合符（音・訓）・仮名点[10]・返点・句点・読点・人名符・ミセケチがあり、墨筆による訓点には、仮名点（音・訓）・声点があることが明らかとなっている[11]。

この二種の訓点の加点時期については、一見して朱筆が先行するように見受けられるが、まれに墨点の上に朱点が乗ることもある。そこで、金水・山田・中野（同）では本資料の訓点加点時期を朱筆は院政末期、黒筆は鎌倉初期頃として幅を持たせた。それは、本資料にヲコト点が見えないことと、本文に加点された声点の体系から判断すると院政期点と見ても矛盾はない一方で、仮名字体・返点の形態・字音仮名点の形態の観点から見ると鎌倉初期頃点と考えられたからである。

今回は鼻音韻尾について述べるので、金水・山田・中野（同）によって本資料全体の字音の特徴とその体系について確認しておく。本資料は声点が平声・平声軽・上声・去声・入声・入声軽を区別する六声体系となっている。さらに、有声声母を持つ去声字に上声点が加点されていることにより、全濁去声の上声化が確認できる。加えて、頭子音

に非鼻音化が反映されていること、侯韻明母字が模韻化を示していることなどから、本資料の字音体系は漢音体系であると判断できる。

3：岩屋寺蔵『高僧傳』の訓点に見られる鼻音韻尾の表記とその加点態度について

3－1：院政末期・鎌倉初期点を持つ仏書訓読資料（紀伝類）における鼻音韻尾の表記について

漢語原音の鼻音韻尾（-m・-n・-ng）の三つは、宗派や学統によって院政期に至るまでに様々な表記や記号で以て写された。しかし、院政期頃に至ると典型的には、

-m→-ム　：陰イム　欽キム　衿キム
-n→-ン　：震シン　申シン　鎮チン
-ng→-ウ・-イ：荘サウ　重チウ　刑ケイ　誠セイ

という表記形に落ち着く（右の例は築島（1967）による）。これらのうち、特にm韻尾とn韻尾の字は、鎌倉初期頃には表記が混乱しやすかったことが指摘されている（春日（1942）・中田（1954）・沼本（1986・1988）・佐々木（2007）等）。[12]

さらにこれらは、同時代にあっても字音直読資料・漢籍訓読資料・仏書訓読資料・和化漢文資料・辞書・字書・音義において、それぞれ和化の度合いなど、資料の性格によって質が異なっていることが明らかにされている（佐々木

（2007））。

よって、本節では『高僧傳』と比較する為、仏書訓読資料のうち特に紀伝類を取り上げ、鼻音韻尾（-m・-n）の書き分けについて見ていくこととする。院政・鎌倉期に加点された資料の鼻音韻尾の書き分けの実態を確認し、それと比較することで、岩屋寺本『高僧傳』の m・n 韻尾を持つ字に対する表記やその加点態度のあり方がより鮮明になると考えたためである。

まず、院政期の例として、佐々木（2003）より、国立国会図書館蔵『大慈恩寺三蔵法師傳』巻第三大治元年（1126）点における鼻音韻尾の書きわけの実態を示す（【表1】）。

表1

	-m	-n	合計
ーム	10	0	10
ーン	0	3	3
合計	10	3	13

【表1】から、院政期加点の仏書訓読資料においては、漢語原音に正しく対応した表記がなされていることが分かる。[13] これは、院政期加点の訓点を持つ他資料においても同じ状況である。

続いて、鎌倉期の加点資料として、同じく佐々木（2003）より、京都大学人文科学研究所蔵『大慈恩寺三蔵法師傳』貞応二年（1223）点における、鼻音韻尾を持つ字に対する仮名点の加点状況を示す（【表2】）。

表2

	˙m	˙n	合計
―ム	53	53	106
―ン	62	375	437
合計	115	428	543

【表2】を見ると、鎌倉初期にはすでに仏書訓読資料において鼻音韻尾の書き分けが混乱していることが分かる。このように、院政期から鎌倉初期にかけて、鼻音韻尾の書きわけは失われつつあったのである。

紀伝類の訓点におけるm・n韻尾の書き分けについての報告は多くはなく、右の資料以外には今のところその実態を詳しく知ることはできないが、字音直読資料や漢籍訓読資料などにおいても、一般にm・n韻尾は院政期

表3

	˙m	˙n	合計
―ム	396	1183	1579
―ン	32	165	197
合計	428	1348	1776

m韻尾（ケム）

n韻尾（セム）

m韻尾（チン）

n韻尾（クヰン）

頃において正しく書き分けられており、鎌倉期に入るとそれが混乱するということが明らかにされている（中田（1954）・沼本（1986）・佐々木（2007）等）。

3-2：本資料の鼻音韻尾の表記について

3-2-1：本資料における鼻音韻尾の表記の実態

本資料のm・n韻尾の仮名点[14]による表記には、「-ム」と「-ン」が用いられている。[15]本項では、本資料全十四帖の鼻音韻尾の仮名点表記がどの程度漢語原音に即したものであるのかを述べることとする。まず、本資料における漢語原音の鼻音韻尾と仮名点との対応関係を【表3】に示す（表内は延べ数。以下、本稿の表は全て延べ数を示している）。

【表3】から、本資料においてn韻尾についてもはや書き分けは認められず、殆どが「-ム」表記になっていることが分かる。m韻尾の表記も、本資料の加点者が大部分を「-ム」で表記しているに過ぎず書き分けとは言えない。

以上によって明らかなように、本資料においてはm・n韻尾双方が原音の鼻音韻尾に対応する書きわけを失っている。鼻音韻尾の書き分けは院政期においては未だ保たれていたわけであるから、それが失われている本資料の訓点（墨筆）は、鎌倉期における鼻音韻尾の加点のあり方と同じ状況にあるということになる。

3-2-2：本資料における鼻音韻尾の加点態度

本資料において、既に鼻音韻尾の書きわけが失われていることを先に確認した。しかしながら、本資料の鼻音韻

尾の仮名点「-ム」・「-ン」と、本文に加点された声点とを併せ見たとき、そこにある関係を認めることが出来る。

【表4-①】（【表4-②】には巻毎の対応を示す）[16]に本資料全体の仮名点と声点の対応を示す。

【表4-①】（左欄の声調は本文に加点された声点により認定したものである）

表4-①

	ーム	ーン
平声	863	0
上声	207	56
去声	321	132
合計	1391	188

平声＝「ム」100％　「ン」0％

上声＝「ム」78.7％　「ン」21.3％

去声＝「ム」70.9％　「ン」29.1％

【表4-①】から、平声の声点が加点された字には「-ム」表記のみで「-ン」表記が見られず、上・去声の声点が加点された字に「-ム」表記と「-ン」表記が見られることが分かる。右表によると、上・去声の字が「-ン」になる率が低いように見えるが、【表4-②】を見ると、巻七以降は鼻音韻尾の表記が殆ど全て「-ム」表記に統一されてしまうことが分かる。このように、巻六と七を境に、仮名点の加点方針が変更されているので、「-ム」表記に統一される前の巻六以前に限って見てみると、

平声＝「-ム」465字100％　「-ン」0字0％

上声＝「-ム」79字59.8％　「-ン」53字40.2％

去声＝「-ム」82字40％　「-ン」123字60％

表4 - ②

巻一	ㆍム	ㆍン
平声	102	0
上声	14	14
去声	12	41
合計	128	55

巻二	ㆍム	ㆍン
平声	46	0
上声	8	7
去声	15	19
合計	69	26

巻三	ㆍム	ㆍン
平声	50	0
上声	10	8
去声	7	18
合計	67	26

巻四	ㆍム	ㆍン
平声	98	0
上声	15	3
去声	11	9
合計	124	12

巻五	ㆍム	ㆍン
平声	83	0
上声	9	17
去声	9	20
合計	101	37

巻六	ㆍム	ㆍン
平声	86	0
上声	23	4
去声	28	16
合計	137	20

巻七	ㆍム	ㆍン
平声	72	0
上声	17	1
去声	40	4
合計	130	5

巻八	ㆍム	ㆍン
平声	60	0
上声	25	0
去声	43	3
合計	128	3

巻九	ㆍム	ㆍン
平声	53	0
上声	14	0
去声	24	1
合計	92	1

巻十	ㆍム	ㆍン
平声	37	0
上声	10	0
去声	38	1
合計	85	1

巻十一	ㆍム	ㆍン
平声	53	0
上声	15	0
去声	34	0
合計	102	0

巻十二	ㆍム	ㆍン
平声	36	0
上声	13	0
去声	10	0
合計	59	0

巻十三	ㆍム	ㆍン
平声	84	0
上声	31	2
去声	48	2
合計	163	4

巻十四	ㆍム	ㆍン
平声	9	0
上声	4	0
去声	4	0
合計	17	0

合計	ㆍム	ㆍン
平声	863	0
上声	207	56
去声	321	132
合計	1391	188

となり、平声とそれ以外（上・去声）で鼻音韻尾の表記がわけられていることが分かる。また、平声点が加点された字が「-ム」表記に統一されていることは、全帖で一貫した方針となっており特に注目される。しかも、この平声点と「-ム」との関係は、原音の声調とは関係がない。たとえ、原音の声調が上・去声であっても本資料にて平声点が加点されていれば、必ずその字は「-ム」で表記されているのである。次に例を挙げる。

巻一：「勸」（平声点）クヱム　『広韻』：「勸」去声願韻

巻二：「餞」（平声点）セム　『広韻』：「餞」上声獮韻・去声線韻

この作業は声点（朱筆）を見なければできない作業であることに注意しなければならない。

以上、「-ム」・「-ン」の表記は、巻六以前には両表記が見えるのに対し、巻七以降は【表４-②】にも明らかなように、殆ど全て韻尾に関係なく「-ム」表記となっていること、仮名点による加点には、声点を見なければできない作業（平声字を「-ム」で統一する作業）が行われていることを確認した。特に後者は、本資料の訓点加点順序が、朱筆の声点が先、墨筆の仮名点が後であったことを示す点、重要である。(17)

以上、仮名点「-ム」「-ン」は、漢語原音の韻尾とは無関係に加点されており、本文に付された声点と一定の対応関係が認められることを述べた。

とはいえ、本資料においてｎ韻尾の字が「-ン」表記される字には偏りが認められる。【表５】（凡例は稿末）に

表5

通番	本文	韻尾	声点	ン		ム	
				巻1-6	巻7-14	巻1-6	巻7-14
1	簡	n	上	7		2	6
2	惋	n	上	4			
3	遠	n	上	4		1	
4	墳	n	上	3		2	2
5	尹	n	上	3	3		4
6	反	n	上	2			
7	婉	n	上	2		1	2
8	輦	n	上	2			3
9	蹇	n	上	1			
10	隱	n	上	1		2	5
11	澁	n	上	1			
12	叛	n	上	1		1	2
13	勉	n	上	1			
14	悃	n	上	1			
15	懇	n	上	1		1	
16	晩	n	上	1			
17	図	n	上	1			2
18	沔	n	上	1		2	2
19	苑	n	上	1		1	1
20	散	n	上	1			1
21	緼	n	上	1			
22	旱	n	上	1			
23	侃	n	上	1		1	
24	練	n	上	*		1	
25	文	n	上	*		1	1
26	鷲	n	去	9	2	1	6
27	郡	n	去	9	1	1	8
28	建	n	去	6	1		9
29	鎮	n	去	5			3
30	歎	n	去	5		1	1
31	訓	n	去	4	1		2
32	峻	n	去	3		1	3
33	片	n	去	2			
34	弁	n	去	2			
35	誕	n	去	2		1	1
36	俊	n	去	2		1	5
37	卞	n	去	2			
38	諫	n	去	2			1
39	翰	n	去	2		1	1
40	擯	n	去	2			1
41	讌	n	去	2			2
42	濬	n	去	2			1
43	春	n	去	1			
44	丞	n	去	1			
45	鷲	n	去	1			
46	献	n	去	1			
47	憲	n	去	1			
48	人	n	去	1			
49	恨	n	去	1			1
50	胤	n	去	1			3
51	幹	n	去	1	1	1	1
52	竣	n	去	1			1
53	殄	n	去	1			
54	段	n	去	1			2
55	貫	n	去	1			1
56	岸	n	去	1			1
57	問	n	去	1		4	1
58	万	n	去	1			
59	傳	n	去	1			
60	練	n	去	1			
61	彦	n	去	1		2	
62	疊	n	去	1			1
63	文	n	去	1			
64	贊	n	去	1		1	
65	浣	n	去	1			
66	駿	n	去	1		2	
67	辨	n	去	1			
68	潤	n	去	1		1	2
69	渾	n	去	1			
70	煥	n	去	1	1		
71	辯	n	去	1		1	2
72	篆	n	去	1			
73	見	n	去	1			
74	聞	n	去	1		2	9
75	蘊	n	去	1			
76	山	n	去	1			
77	畔	n	去	1			1
78	遁	n	去	1		1	2
79	羨	n	去	1			1
80	鴈	n	去	1		1	1
81	乱	n	去	1		2	4
82	戰	n	去	1		1	2
83	頓	n	去	1			
84	困	n	去	1			
85	盥	n	去	1			
86	患	n	去	1			1
87	叛	n	去	*			1
88	婉	n	去	*		1	
89	苑	n	去	*			1
90	簡	n	平	*			1
91	春	n	平	*		2	
92	献	n	平	*		1	
93	人	n	平	*		3	3
94	墳	n	平	*		1	
95	鎮	n	平	*		2	3
96	懇	n	平	*			1
97	文	n	平	*		6	5
98	渾	n	平	*			4
99	見	n	平	*			1
100	蘊	n	平	*		1	1
101	山	n	平	*		8	1
合計				147	10	67	134

通番	本文	韻尾	声点	ン		ム	
				巻1-6	巻7-14	巻1-6	巻7-14
1	奄	m	上	3		1	3
2	琰	m	上	2			1
3	儼	m	上	1			1
4	慘	m	上	1			1
5	飲	m	上	1			2
6	冉	m	上	1			
7	痰	m	上	1			
8	坎	m	上	*			1
9	鑒	m	去	5			4
10	讖	m	去	2			2
11	範	m	去	2		1	
12	范	m	去	2	3		3
13	朕	m	去	1			1
14	坎	m	去	1			
15	任	m	去	1		5	7
16	潛	m	去	1		2	6
17	豔	m	去	1			
18	斬	m	去		1		1
19	含	m	去	1			1
20	潛	m	平	*		1	
21	含	m	平	*		1	
22	琰	m	平	*			1
合計				27	4	11	35

は、声点が付され、なおかつ「-ン」表記が一度でも出現する字を本資料から全て集め、その字が出現する巻を一-六と七-十四に分類し、付された声点と共に示した（同じ字であっても別の箇所では異なる声点が加点されている字があり、その場合は別々に示している）。

本資料において、n韻尾を持ち、なおかつ声点が付された字は合計で459字1331例ある。[18] そのうち、【表5】に示したn韻尾字84字、157例（【表5】「ン」表記合計欄参照）だけが、「-ン」表記されるのである。n韻尾字で「ン」表記されるのは巻六以前が大部分を占めており（巻一-六：147例　巻七-十四：10例）、例えば、通番26「鷰」字などはn韻尾を持つ字だが、巻六以前で「ン」表記9例、「ム」表記1例であり、巻七以降は「ン」表記2例、「ム」表記6例となり表記が逆転する。[19]

ここから考えられることは、本資料の仮名点加点者の巻一-六における加点基準の中には「-ン」表記されるべき字がある程度固定されていたのではないかということである。

しかし、特定のn韻尾字に「-ン」で表記すべきという基準を、加点者が仮に持っていたとしても、平声点が加点された字には一度も「-ン」表記が現れないことはやはり重視すべきで、声点との関連は否定することは出来ないと考えるのである。

また、鼻音韻尾の表記と声点とが関連するということは、声点が示す音調（すなわち、平声点＝低平調・上声点＝高平調・去声点＝上昇調）が問題になると思われる。鼻音韻尾の表記と声点が関連していたとすれば、平声字には低平調の「ム」、上・去声字には高平調もしくは上昇調の「ム」「ン」をもって鼻音韻尾を表記したと考えることはできる。

しかしながら、本資料では平声点が加点された字については「ム」で一貫されているのでともかくとして、上・去

声の声点が加点された字に対する鼻音韻尾の表記は、巻七以降、声点や本文の字に関係なく全て「-ム」表記で統一されてしまう。このような状況から音調との関わりを考えるのは困難である。

従って、本資料に見られる鼻音韻尾の表記は、音調とは関係がないものと考える。とはいえ、このような声点と関連させた鼻音韻尾の表記を持つ資料は、これまでに報告がなく特異である。(20)

4：まとめ

本稿で述べたことは以下の通り。

①本資料は、漢語原音に即した鼻音韻尾の書き分けを失っている（墨筆による仮名点）。鼻音韻尾の書き分けが失われているのは、鎌倉期の加点資料に見られる特徴と同じである。

②従って、本資料の墨筆による訓点の加点時期は鎌倉期に入ってからの可能性が高いと考えられる。

③本資料の訓点は、原音に即した鼻音韻尾の書き分けは失っているが、巻六までは、平声点が加点された字には「-ム」、上声・去声点が加点された字には、「-ム」「-ン」で以て表記されやすい傾向にあった。このような加点基準はこれまで未報告である。

④朱筆の声点（平声・上声・去声）に合わせて墨筆の仮名点（「-ム」・「-ン」）の加点をしたと考えられるので、加点時期については、墨筆の仮名点は朱筆の声点よりも後の加点ということになる。

⑤声点と関連させて鼻音韻尾を加点する方針は巻七から変更されていると考えられ、巻七以降の巻では殆ど全ての鼻

音韻尾が「ム」表記に統一されるようになる。

以上、本資料の鼻音韻尾の表記とその加点態度について見てきた。本資料の訓点は加点が極めて密であり、院政・鎌倉初期における国語資料としての活用が見込まれる。その他、岩屋寺本以外の諸本との訓点を比較し、訓読法の違いを明らかにすることも重要な課題である。

また、本資料は奥書によると、桂大納言（藤原光頼）による訓点が付されているということになっている（巻十四奥書）。この記述をそのまま取るかどうかは、今後研究の余地があるが、学僧以外の手による内典の加点資料という点から見ても、本資料は非常に貴重である。

但し、桂大納言入道は院政期に歿しているので、本資料に見られる訓点のうち、朱点は院政期点であるから良いとしても墨筆は桂大納言入道の直接の加点とは認められない。仮に、現在本書に見られる訓点の祖点が桂大納言入道の点であったとしても、岩屋寺本『高僧傳』の訓点には鎌倉初期の特徴が少なくとも墨筆の訓点には見えている訳であるから、後の加点者がその当時の基準で以て、桂大納言入道の点を移点したということになろう。

今回は鼻音韻尾について考察した。他の訓点については稿を改める。

［本文注］

（1）遠藤（1952：133-134.162）は、平安中期に早く鼻音韻尾の書き分けが失われ、平安末期頃再び復活するとする。しかし、平安中期において書き分けの無い資料は散発的で、全体の傾向ではない（中田（1954：993-997））。

（2）金沢文庫にも『高僧傳』が存するとのことを落合俊典氏より御教示頂いた（原本未見）。

（3）岩井（1938）は十巻十冊・大矢（1909）は本数を十と数えるが、『石山寺の研究（一切經篇）』によれば、これは序録を入れて十巻十帖であることが分かる。

（4）訓点については諸先行研究いずれも詳しい記述がなく、この他にも訓点が存する可能性がある。訓点の加点年代は未だ明らかでないが、大矢（1909）では、石山寺蔵本『高僧傳』の訓点がいくつか紹介されており、そこに見られる鼻音韻尾の書き分けを見てみると、いずれも原音に即して加点されていることから、加点時期は少なくとも院政期以前の可能性が高いと思われる。また、巻九の奥書に、醍醐寺本と校合したという記述が見え、かつて醍醐寺に『高僧傳』が存していたことが分かる。この他、久安元年写高野山光明院蔵『東寺一切経目録』（『昭和法寶總目録』による）に『高僧傳』十巻の書名が見え、東寺にも『高僧傳』があったと考えられる。

（5）岩屋寺の経函は、巻一‐七までを「天」函に収め、巻八‐十四までを「人」函に収めている。

（6）料紙の種類、版式と岩屋寺一切経の他の経典に付された刊記より判断した。

（7）思渓版の刊期については、内藤（1934：685）を参照。

（8）佐藤（2014）。本資料の頭注に引用された韻書の中には『東宮切韻』が含まれており、逸文として高い価値を持つ。また、頭注にも訓点が施される場合がある。

（9）藤原光頼は、平安から院政期にかけて活躍した公卿。父は藤原顕頼、母は藤原俊忠の女。葉室大納言とも。法名は光然、後に理光とした。天治元年（1124）生、承安三年（1173）没。『平治物語』、『今鏡』に光頼についての記述が見える（『日本古典文学大辞典』岩波書店「藤原光頼」（黒川昌享執筆による）。また、『愚管抄』に光頼について次のような記述が見える（落合（2015））。「光頼大納言カツラノ入道トテアリシコソ末代ニヌケイデ、人ニホメラレシカ」これにより、桂大納言入道とは、藤原光頼その人であるということが分かる。

（10）朱筆による仮名点は、頭注に限られる。

（11）墨筆による声点は全巻通じて極少数である。また、墨筆による仮名点には後筆かと思われるものがある。原本調査の結果、巻一から六までには少なくとも二筆以上あり、巻七以降は所々に後筆が認められる程度で殆ど一筆と判断する。

(12) 規範性の低い資料や角筆訓点資料では、字音の表記が院政期よりも早く混乱する（中田（1954）・小林（1987）・沼本（1986）・佐々木（2007））。

(13) 興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師傳』院政期点においても、築島（1967）が具体的な数は示していないものの鼻音韻尾の書き分けの存在を指摘している。このほかに、興福寺蔵『高僧傳』康和二年（1101）点もｍ・ｎ韻尾を書き分けていることを、中田（1954：996）が報告している。

(14) 以下、本稿では鼻音韻尾の書き分けが失われている場合においても、当該字が本来有していた韻尾で以て分類する。

(15) 本資料には「ン」の古形である「レ」も用いられているが、今回は「ン」と同等に扱った。

(16) 【表4-①・②】はともに声点と仮名点両方が加点されている字を用例として採ったので、仮名点のみ加点された字も用例に入れている【表3】とは数値が異なっている。

(17) 但し、2・3で述べたように、墨筆の上に朱筆が重ねて加点されることもあり、若干の例外はある。

(18) 【表3】のｎ韻尾字1348例は声点なしの用例含むので、これとは数値が異なっている。

(19) 通番25・63・97「文」、76・101「山」字などは、平声点が加点されない場合に限り「ン」表記が現れる。このことからも、声点と鼻音韻尾の表記の関連がうかがえる。また、ｎ韻尾字に対する「ン」表記は、上・去声字双方に見られた。これは、巻6以前と巻7以降で偏りは特になかった。但し、巻七以降は「ム」表記が大多数を占めるようになるので、巻6以前より数は少ない。

(20) 本資料の声点の加点や鼻音韻尾の表記は一貫性がなく（同じ字であっても、異なる声点が付されることや「ム」と「ン」両方の表記が見えること）、また『広韻』の声調ともずれるところが多いので、加点の際に何らかの韻書・字書の類の使用も想定しにくい。加点作業に先行書の存在をもし考えるならば、平声のみの韻書（例えば、『詩苑韻集』）か字書を用いて、まずは本文に平声点の加点をしてから仮名点を付し、その後、異なる資料を用いてか、自らの知識を以てして上・去声字にも声点を加点し、同じように仮名点を付したということになろうか。しかしながら、本資料において、声点が加点される字にやや偏りがあるように見えることは確かなので（『広韻』の小韻代表字と同じ字に声点の加点が多い）、先行書を考えることも重要な視点である。今後考えたい。

［使用文献］

『岩屋寺蔵思渓版『高僧傳』影印篇』（未刊）国際仏教学大学院大学日本古写経研究所
『愚管抄』（1967）岡見正雄・赤松俊秀校注　岩波書店（『日本古典文学大系』（86））
『新校互註宋本廣韻』（1993）余廼永校注　中文大学出版社
『日本古寫經善本叢刊第九輯　高僧傳卷五　續高僧傳卷二八・二九・三〇』（2015）国際仏教大学院大学日本古写経研究所

［参考文献］

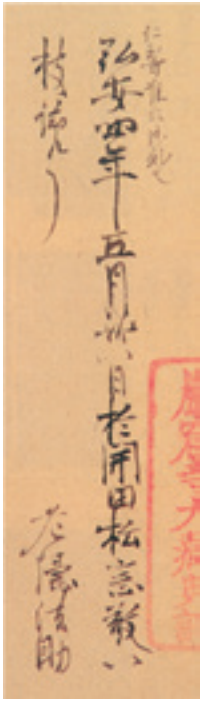
石山寺文化財総合調査団（1978）『石山寺の研究（一切經編）』法蔵館
岩井諦亮（1938）「石山寺本梁高僧傳と其の道安傳校異」『支那仏教史学』（2 - 2）支那佛教史学会
上杉智英（2014）「岩屋寺一切経について」（未刊行発表資料）
遠藤嘉基（1952）『訓點資料と訓點語の研究』弘文堂
大矢透（1909）『假名遣及假名字體沿革史料』帝国学士院（勉誠社複刻版（1969）による）
落合俊典（2015）「南宋思渓版の過去・現在・未来」『漢傳佛教研究的過去現在未来会議論文集』佛光大学（台湾）
春日政治（1942）「西大寺本金光明最勝王経古點の國語學的研究」『斯道文庫紀要』（1）斯道文庫（勉誠社複刻版（1969）による）
紀贇（2009）『慧皎『高僧傳』研究』上海古籍出版社
金水敏・山田昇平・中野直樹（2015）「日本語史資料として見た岩屋寺蔵『高僧傳』について」『東アジア仏教写本研究』国際仏教学大学院大学日本古写経研究所
国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会（2006）『日本現存八種一切経対照目録』国際仏教学大学院大学
小林芳規（1987）『角筆文獻の國語學的研究　研究篇』汲古書院
佐々木勇（2003）「『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点における漢音形の日本語化―院政期点および『蒙求』字音点との比較を通して

見る―」『新大国語』新潟大学（佐々木勇（2007）に再録）
佐々木勇（2007）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　研究篇』汲古書院
佐藤礼子（2014）「岩屋寺高僧伝頭注―引書考証ならびに切韻系韻書考―」『いとくら』（9）国際仏教大学院大学
定源（2015）「日本新出『高僧傳』古寫經本研究序説―刊本との比較に基づく成立問題の一試論―」『日本古寫經善本叢刊　第九輯高僧傳巻五　續高僧傳巻二八・二九・三〇』国際仏教大学院大学日本古写経研究所
増上寺史料編纂所（1981）『増上寺史料集別巻』大本山増上寺
築島裕（1967）『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語学的研究　研究篇』東京大学出版会（築島裕（1956）「興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点」『東京大学教養学部人文科学科紀要』（9）東京大学に加筆したもの）
内藤湖南（1934）「湖州思渓圓覺禪院新雕大藏經律論等目録（跋文）」『昭和法寶總目録』（3）大蔵出版株式会社
中田祝夫（1954）『古點本の國語學的研究　総論篇』大日本雄辯會講談社
奈良国立文化財研究所（1986）『興福寺典籍文書目録』（1）法蔵館
沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』東京堂出版
沼本克明（1988）「日本語のモーラ音素「ン」の通時的背景寸考」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』（1）広島大学（沼本克明（1997）に再録）
沼本克明（1997）『日本漢字音の歴史的研究―體系と表記をめぐって―』汲古書院
山本錠之助（1934）『岩屋寺誌』知多郡内海町第二尋常小学校

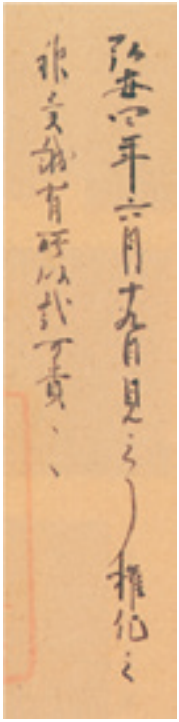
［奥書影印］

巻五

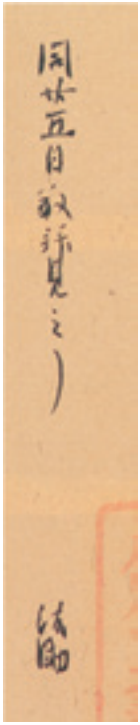
巻七



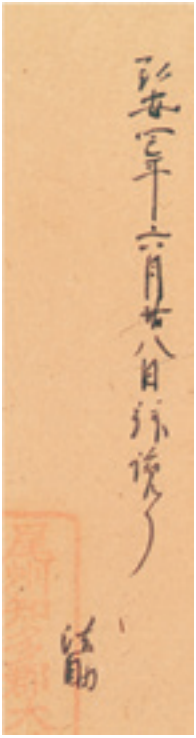
巻十



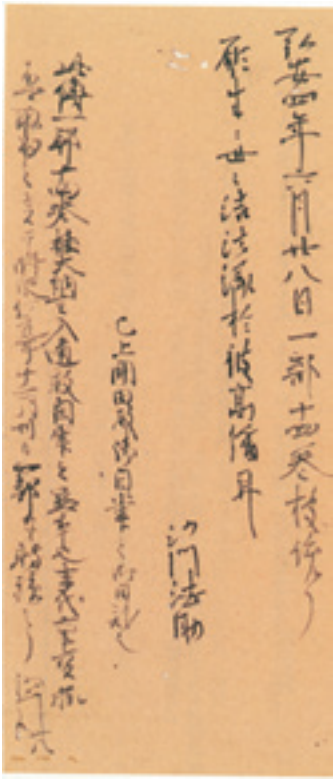
巻十二



巻十三



巻十四



［表5凡例］

本表は、『高僧傳』において、「-ン」表記が一度でも用いられた鼻音韻尾字を全て抜き出し、加点された声点と仮名点の関係を巻一－六と七－十四に分けて整理したものである。

・原音がn韻のものと、m韻のものとに分け、例数が多いものから順に配列している。

・同じ字であっても、異なる声点が加点されることがある字は、各々別に掲出している。

例えば、通番1「簡」字は上声点が加点された場合、通番90「簡」字は平声点が加点された場合の数値を示している。

・＊は別の声点が加点されている例があり、そちらに「-ン」表記があることを示している。

［付記］

本資料の原本調査に際して、岩屋寺・興福寺当局と仏教学大学院大学日本古写経研究所より格別の御厚誼を賜りました。また、

諸先生方から多くの御指導をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Regarding the Transcription of Nasal Final Consonants and their Marking in *Kōsōden* held in Iwaya-ji

Naoki Nakano

A manuscript of *Kōsōden* (Memoirs of Eminent Monks) spanning fourteen scrolls is included in the collection of Buddhist scriptures in Iwaya-ji (Aichi Prefecture). The text is glossed with numerous *kunten* in both red and black ink. Kinsui, Yamada & Nakano (2015) estimate the date of the *kunten* glosses to be between late Insei and early Kamakura periods. The estimate is wide since the *kunten* display characteristics attested in both the Insei and early Kamakura periods.

For this reason, it is difficult to determine an exact date for the *kunten* in *Kōsōden* despite their large number. The manuscript includes several colophons, though the relationship between these colophons and the added *kunten* is unclear.

In this paper, we look at the transcription of different nasal final consonants, consider the date of the writing of the *kunten*, and discuss the principles of how different nasal final consonants are transcribed. There was a correspondence between the transcription of Sino-Japanese nasal final and their original Chinese pronunciations until the Insei period, but this was lost in the Kamakura period (except in some more conservative works). Thus, the date of *kunten* can be determined based on the manner in which nasal final consonants are transcribed. This paper shows that the nasal final consonants in the *kunten* of *Kōsōden* are not in correspondence with their Chinese pronunciations, thus dating the *kunten* at the early Kamakura period.

Whilst the transcriptions of nasal final consonants do not follow the original Chinese pronunciations, this paper suggests that there may be a correspondence between the transcription of nasal final consonants and characters' tones as marked on the manuscript. This possibility has not yet been discussed in previous research; additional research using other manuscripts is required for further investigation.